

西真寺通信

令和二年秋号発行 西真寺

住職からのご報告

新型コロナウイルス禍の中、西真寺ご門徒の皆様におかれましては、新しい生活様式の中で、耐え忍びながら、少しずつでも元の生活に戻れることを願われていることとお察し致します。

この度の西真寺の寺報は、新たに「西真寺通信」として生まれ変わり、これを機縁に、少しでも伝わりやすくなるよう勤めて参りますので、引き続きの付き合いをお願いいたします。

さて、お盆とお彼岸も終わり、今年度の報恩講は、ご案内の通り、私と役員のみの内勤めとさせて頂きましたことをご報告し

ます。

また、事後報告になりましたが、彼岸中に個別式の永代供養墓「はまなす墓苑」を建立致しました。

この「はまなす墓苑」については、会津屋さんと連携、協働し、商品開発や販促計画を練り、その上で西真寺役員の承諾を得て施工したもので、西真寺ご門徒さんに、ご報告が遅れましたことをお詫び致します。

これまでの永代供養墓は、合葬墓のみで、寺の墓地を墓じまいされる方の受け皿として建立しておりました。この為、墓じまいを推奨する方向に進みがち

で、寺の護持よりもお檀家離れにつながる傾向がありました。

この「はまなす墓苑」は、寺に縁のなかった方々を対象に、新規拡充につながる個別方式を採用させて頂きました。

個別式永代墓は、いずれ絶えるご夫婦や家族、おひとり様を受け皿とし、個別型の納骨を経て合葬墓に埋葬する為、遺族がお参りする対象や位置を、明確化できる利点があります。既に夫婦4組、家族2組、個人1件、合葬墓1件が契約済みです。

また、夫婦と子供の生前契約では、まず夫婦それぞれが亡くなる年数が異なり、その次の子供が亡くなるまで年数の開きがあり、長期に渡り使用できる個別付きの永代供養墓です。

そして循環型ですので、最後に納骨された方から6年後に全員分を合葬墓に埋葬する為、空いた納骨墓に、新規契約が代わりに納骨できる「開かれた墓」の仕組みと成ります。

もちろん永代供養の合葬墓は、西真寺のご門徒様も対象としておりますので、いつでもご相談ください。その場合は、個別式の販売代行の会津屋さんとは異なり、西真寺が窓口になり、消費税もかかりません。

尚、今回の建立については、私が高年務めた新潟の寺を退職した際の、わずかな退職金から支出致させて頂きましたので、護持会費用の負担はありませんのでご安心ください。

合掌



「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」²
—親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争—

◆本願寺教団と権力者

一向一揆にみられる集団心理の変容過程は次のように説明することが出来ます。

① 社会的圧力を背景に、自分たちの生活に対する不満から内集団活動に 変化し、内集団を脅かす対象に攻撃が向けられる。

② 集団内部の不安要素が募れば、**衝動的な行動が外敵に向けられることで内部集団がまとまり**、秩序が生まれ、維持される。(フロイト・精神分析学)

③ 群衆を構成する、社会に対する**不安や感情、観念、模倣**を媒体として集団感染や群集

心理のなだれ現象を引き起こす。(ロ・エ・ターナー…アメリカの社会心理学者)

封建制度が進む中で起こった一向一揆は、領主と農民の間に介在する階層が搾取する制度(作合さくあい)からの解放という成果を生み、本願寺教団が封建制度の改革を成し遂げました。

しかし一方で、二万人を超える犠牲者をはらったことで、教団の護持を強化する方向に進み、支配者権力に近寄る契機になったのです。

このような集団行動は、一面では行動規範からの逸脱であり、新しい社会秩序への道筋を示し、創造的な面も備えていたとも考えられます。

また、当時の門徒衆が加賀の

守護富樫政親とがしまさちかを滅亡させ、「百姓の持ちたる国」を樹立したことは、後の信長がこの勢力を恐れ、圧力をかけた機縁となっていたことは否めません

当初、政親は家督で弟の幸千代と争っていましたが、本願寺派の援助や加賀の武士団の支持により、弟を追い出し当主に返り咲くことができました。しかし、政親が、その後本願寺門徒を支配統率しようと弾圧を加えた為、本願寺派の加賀門徒に領主と結託して攻められ、自害に追いやられたのです。

この加賀の一揆以来、各大名が本願寺と関係を持ちたがり、

ほそかわまさむと

細川政元と結んだ関係から政争

に巻き込まれ、山科本願寺を焼失する結果となりました。この各大名との関係が深まる過程

は、教団が国策追従に変化した背景でもあったのです。

さらに、当時の天皇が、将軍に実権を握られていた為に、新興勢力である本願寺と手を結び、天皇家の出家者が入る寺の寺格(門跡もんせき)に格上げしたことも、国家体制の中での地位的向上につながったのです。

門跡制度とは、明らかに血統に対する信仰から生まれたもので、天皇崇拝の万世一系の考え方そのものです。大谷派が法主制度から門首制度に改革されたのも血に対する権威信仰の否定なのです。(次号に続く)



死刑制度と悪を考える① 親鸞の悪の捉え方

1. 死刑制度の現状

死刑制度について、法治国家日本では、当たり前の刑罰で、この制度に異を唱える人は少数派であり、大半の日本人が賛成の制度です。しかし、立法主義から始まったヨーロッパの先進国でも、すでに死刑制度は廃止され、アメリカでも州によっては廃止（二一州）、もしくは停止され、南米でも廃止されています。

つい最近まで軍国主義の国であった韓国では、死刑制度は残っていますが、1997年以来、執行凍結の状態が続いています。

死刑制度を存置する国は、ヨーロッパでは独裁国家のみで、アジア、アフリカの一部とイスラム圏国家などの後進国がほとんどで、先進国ではアメリカの一部の州と

日本だけです。

その他、発展途上国のアジア圏に多い反面、アフリカでは、53カ国中、死刑廃止と執行していない国を合わせると33カ国、政情が安定している国ほど停止廃止の方向に進んでいるのが現状です。

世界の三大宗教で見ると、イスラム教圏内は執行率が高く、カトリック教では廃止、ロシアでさえ凍結しています。仏教国であるブータン、ネパールは廃止、スリランカは凍結の後復活しています。タイなどは停止していましたが、麻薬密売や腐敗と汚職の最高刑で復活しています。宗教や歴史上の背景や文化の違いなど様々な要素によって、死刑制度に対する考え方の違いがあることが理解できま

ることも分かります。日本を除く世界の趨勢（すうせい）は、死刑廃止の方向に傾いていると言えるのです。

2. 死刑制度存置論の根本

死刑制度の存置論には、犯罪の抑止力と被害者の応報感情に依る報復権の主張があります。

デーブ・アーチャーとローズマリー・ガードナーによる「暴力と殺人の国際比較」の中で「殺人と死刑制度」による抑止力の研究があります。

この結論として「この国際比較標本では、死刑廃止によって殺人率の絶対的下降も、抑止理論によって予測される上昇も生じなかった。さらに言えば、これらの国々における廃止後の殺人率は、死罪以外の犯罪率に比べても下降が著しかった」と抑止効果は無いとしています。アメリカでも死刑廃止の州の犯罪

率は、国全体の犯罪率より低いのです。

悪いことをした人間は必ず裁きを受け、罪を償わなければならないという考えは当然のことです。

しかし、人を殺した人間に対し、国による殺人で済ませることとは、社会における根本的な解決というよりも、権力による、見せしめにしかなりません。しかもその抑止力によって殺人事件は減っていくのでしょうか。

凶悪犯罪が増えているから、その為の抑止力が必要であると考えるも理解できません。しかし、実際に日本での殺人犯罪の件数は、2007年が戦後最低の1199件で、戦後最高が1954年の3081件で、殺人事件は減少しており、増えているという実感反応は、メディアの発達によるものです。

（次号に続く）

仏教の基礎講座

■四苦八苦

お釈迦様は、最初の説法で「人生は苦である」と教えられ、その姿として四苦八苦を説かれました。四苦とは、生苦・老苦・病苦・死苦をいいます。

生まれて、老いて、病気になつて、死ぬ。これは人間に限らず、全ての生物にとつての運命的な苦しみなので、根本苦といえます。

この四苦に、愛するものと離れねばならない「愛別離苦」(あいべつりく)、いやなものに会わなければならぬ「怨憎会苦」(おんぞうえく)、欲しいものが手に入らない「求不得苦」(ぐふとつく)、人間の心身を形成する五要素(色||肉体、受||感覚、想||知覚、行||意思、識||認識)

をうまくコントロールできない「五蘊盛苦」(ごうんじようく)の四つを加え八苦とされたのです。

現在、非常に苦しむという意味でよく「四苦八苦だ」といいますが、それはお釈迦様の説法からきた言葉なのです。

そもそも自分の思い通りにならないから「苦」というわけです。

そして、全てを自分の思い通りに出来ない真実を受け容れることができず、全てを自分の思い通りにしようとする私たちの心に苦の原因があるのです。



●愚禿(ぐとく)が心は、内は愚にして外は賢なり

この言葉は『愚禿鈔』の中の一節で、親鸞聖人が八三歳の頃に著されたものです。

人間は誰しも良い人間に見られたいし、外見を賢者のように装います。

しかし、よく見せようと思えば思うほど、うちに潜む愚かさ(肥大化し、表と裏が乖離(かいり)し、その差が顕著になります)。

剃髪し、綺麗な装束をまとい、賢そうな僧侶の姿をしているも、中身は愚かな凡夫であることを自覚したのが聖人です。

愚禿(ぐとく)・愚かな(げ)と名のり、本当の自分と向き合いながら生きた求道者です。

聖人はまた

●賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

と述べており、私たち凡夫は、外見に捉われず、真の自分を生きる姿、つまり自己と向き合う姿勢や態度こそが問われているのです。

聖人の言葉は、人間の本質を見抜いていたことを顕しているのです。

浄土真宗本願寺派
信飯山西真寺

村上市寺町三の二十九

☎0254・52・3458